

研究開発志向型M&AのR&D効率に 影響を及ぼす要因



東京理科大学
イノベーション研究科 知的財産戦略専攻
教授 石井 康之^{*}
第一生命保険株式会社 久留米支社
アソシエイト 町田 雄治^{**}

本稿では、研究開発志向型M&Aを実施した企業の、その後の研究開発効率に及ぼす影響要因について分析した。分析の結果、異業種よりも同業種間のM&Aが、合併よりも買収形態によるM&Aが研究開発効率の良いことが判明した。また、相互の技術分野は類似している方が効率の高さに繋がっていることが判明した。研究開発費の相対的規模については、研究開発効率を最適にする適度な水準が存在することが分かった。

1. はじめに

近年、M&A（企業の合併・買収）は、企業の経営上不可欠の戦略として位置づけられるに至った。リーマンショック後に一時停滞はあったものの、1990年代後半以降、日本企業によるM&Aの実施件数は増加の一途をたどってきた¹。

その中でM&Aの目的には、厳しく閉塞する経営環境からの打開を意図するというものと、多角化や事業領域の拡大等より前向きな積極的な経営展開を目指すものとに分けることができよう。いわば打開型と前進型とに分けられる。その中でも、研究開発力や技術力の向上といった目的は、後者の典型例といえよう。こうした前進型のM&Aを実施する企業にとっては、どのような条件下で研究開発効率が高まる方向に変化してきたかという点の確認は、M&A実施すること自体の意義を見直す上での重要な仮題となる。本稿では、こうした典型例を含む前進型のM&A

1 <http://www.esri.go.jp/jp/mer/kenkyukai/080827-01.pdf> (2008年8月28日)

2 Hitt, M.A., Hoskison, R.E., Ireland, R.D. and Harrison, J.S. : Effects of Acquisition on R&D Inputs and Outputs, *The Academy of Management Journal*, Vol.34, No.3, pp.693-706, 1991

3 Hitt, M.A., Hoskison, R.E., Ireland, R.D. Johnson, R.A. and Moesel, D.D. : The Market for Corporate Control and Firm Innovation, *The Academy of Management Journal*, Vol.39, No.5, pp.1084-1119, 1996

4 Gantumur, T. and Stephan, A. : Mergers & Acquisitions and Innovation Performance in the Telecommunications Equipment Industry, *CESIS Electronic Working Paper Series* No.111, 2007

5 Ornaghi, C. : Mergers and Innovation in Big Pharma, *International Journal of Industrial Organization*, Vol. 27, Issue 1, pp.70-79, 2009